

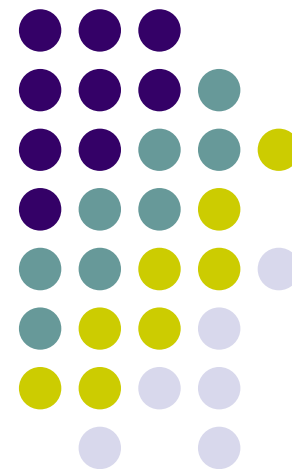
# 明治初期における 西洋簿記導入過程の研究

2012. 5. 24.

高松大学経営学部

津村 怜花

tsumura@takamatsu-u.ac.jp





# 本報告の構成

1. 会計史研究の現状
2. 問題意識
3. 本研究の目的
4. 研究方法と研究対象
5. 3組の簿記書から読み解く、西洋簿記の導入史
6. 研究結果と課題



# 1. 会計史研究の現状

- わが国における日本の会計史研究の現状
  - 日本の会計史学の研究対象のほとんどが英・米・独などに関する研究であり、「日本」の会計史を専門的に研究している研究者は、わずか10名にも満たない（千葉[2008] 191頁）。

## 近代以降の日本会計（制度）史の問題点

- 英・米・独などからの輸入により変革を遂げてきた
- 日本の会計（制度）史は極端に言えば英・米・独などの会計（制度）史として扱われる傾向にある（千葉[2008] 197-198頁）



# 1. 会計史研究の現状

- 近年の会計研究の「国際的調和化」と「比較会計研究」の隆盛に伴い、「**日本会計制度史**」が求められている（千葉[2008] 191-192頁）。

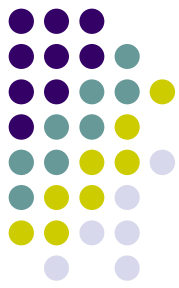
## 日本会計(制度)史の出発点

- 1874(明治7)年以来の長い歴史を有する(千葉[2008] 191頁)。
- 国立銀行の会計システムとして制度化された『銀行簿記精法』(1873(明治6)年)と、複式簿記によってシンボライズされる近代企業化精神を鼓舞した『帳合之法』(1873-1874(明治6-7)年)は日本の会計制度の歩みの出発点における双璧である(黒澤[1976]3-4頁)。



## 2. 問題意識

- 明治初期の簿記・会計史研究
  - 会計制度史として言及されても、単に邦訳簿記書の時代とされ、詳細な考察は行われていない
    - 『帳合之法』, 『銀行簿記精法』, 『馬耳蘇氏記簿法』および『馬耳蘇氏複式記簿法』の3つの潮流がある(黒澤[1990])
    - 西洋簿記の導入の経路にはアメリカ系の商法講習所, 慶應義塾, 文部省, イギリス系の工部省, 紙幣寮, 造幣寮といった6つの源泉がある(西川[1982] 66-67頁)
  - 簿記書の個別研究は多数あるが、概ね3組の簿記書に限定される(片岡[2007], 同[2008]; 西川[1971], 同[1982]など)



## 2. 問題意識

- 日本の簿記・会計史において、明治初期を単なる「邦訳簿記書の時代」としてよいのであろうか？
- 西洋簿記の導入史は最初期の3組の簿記書、あるいは主要な簿記教育機関および西洋簿記導入機関によって系統分けできるものであろうか？

明治初期を西洋簿記の導入期として捉え  
その知識の導入過程を点描したい



### 3. 本研究の目的

- 明治初期を西洋簿記の導入期として捉え、その知識の導入過程を点描するうえでの基盤を築く
  1. 最初期の主要な簿記書の個別考察により、各簿記書の出版の背景、教示内容や先行研究ではあまり行われていない原著との詳細な比較考察から邦訳の工夫を見出すなど、各簿記書の特徴を明らかにする
  2. 簿記書間の関係を出版順に(時系列で)整理する



## 4. 研究方法と研究対象

### ● 会計史研究

- 実際の帳簿(一次史料)を紐解く史料史的研究
- 印刷文献(二次史料)を紐解く文献史的研究
- 二次史料による研究の必要性
  - 一般に歴史研究は、一次史料を解釈の基礎におくのであるが、会計史研究では十分な一次史料を集めることが困難である(小林[1994]6頁;三代川[1997]3頁)
  - 明治初期において西洋簿記を実務に用いていた企業は限定的であり、さらに現時点で残存、発見されている帳簿も極僅かである。
  - 明治初期における西洋簿記の導入は、教科書を通じた知識の伝播が重要な役割を果たしていた。





## 4. 研究方法と研究対象

- 研究対象

最初期の簿記書であり、教育機関で広く利用された3組の簿記書を選択

- 『**帳合之法**』(1873/1874)

わが国で最初に出版された西洋簿記(単式簿記)の邦訳書であり、慶應義塾を中心とした私学で用いられた。

- 『**銀行簿記精法**』(1873)

わが国で最初に出版された複式簿記の邦訳書であり、国立銀行を中心に実務で用いられた。

- 『**馬耳蘇氏記簿法**』および『**馬耳蘇氏複式記簿**』(1875/1876)

文部省から発行された中小学の教科書であり、広く学校教育で用いられた。

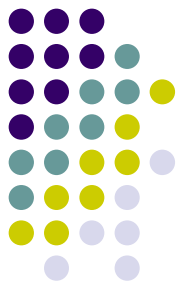
# 5. 3組の簿記書から読み解く、 西洋簿記の導入史



## ● 3組の簿記書の特徴

	銀行簿記精法	帳合之法	馬耳蘇氏記簿法
出版年	明治6年12月（複式簿記）	明治6年6月（単式簿記） 明治7年6月（複式簿記）	明治8年3,10月（単式簿記） 明治9年9月（複式簿記）
背景にある法律等	明治5年11月 国立銀行条例	実学重視（近代化の志向）	明治5年6月 学制
原著など	Shand, Gilbert（イギリス） Marsh（アメリカ）など	Bryant, Stratton, Packard （アメリカ）	Marsh（アメリカ）
邦訳者	多数の大蔵省官吏	福澤諭吉（民間人）	小林儀秀（文部省官吏）
邦訳方法	Shandの講述を基に削除、 加筆	原著を一部省略 福澤による説明が加筆	原著のほぼ完訳 文章を区切る配慮
使用目的	銀行運営のため	広く学校教育として	広く学校教育として
使用対象者	銀行関係者，大蔵省官吏	商家などの人々	小中学生，万人
帳簿組織	特殊仕訳帳，総勘定元帳	日記帳，仕訳帳，元帳	日記帳，仕訳帳，元帳
帳簿形式	横書き	縦書き	縦書き
貸借分類の説明	日記帳類と総勘定元帳では 貸借逆転	価値受渡説あるいは価値得 失説	擬人法
問題点	元帳の締切方法などの説明 がない 「凡例」と説明が一致して いない	日記帳の頁毎の合計額の計 算など，原著の形式を無視 した箇所がある	説明と帳簿の書き方が不一致 の箇所がある 原著に加えられた一文の意味 が不明瞭

# 5. 3組の簿記書から読み解く, 西洋簿記の導入史



- 教示内容における相違点の原因
  - 原著や参考にした簿記書による教示内容の相違であり、各簿記書の初版出版時のアメリカ・イギリスの簿記書の特徴による (Previts and Merino [1979]; 中野[1992]など)
  - 1870年代の日本でこれらの簿記書が邦訳された理由は何か？
    - 原著などはいずれも、1870年代のアメリカ・イギリスにおいて広く普及していた
  - 教示内容の相違は邦訳簿記書における特徴とは切り離して考えるべきである。

# 明治初期の主な邦訳簿記書の出版年と原著などの初版の出版年

イギリス

アメリカ

日本

**Hutton** 初版 1771 以前

【『日用簿記法』原著 1858?】

備考…第3版の出版が1771年

**Gilbart** 初版 1828 以前

【『銀行簿記精法』の参考書 不明】

備考…第2版の出版が1828年

**Inglis** 初版 1849 以前

【『商家必用』原著 1872】

**Marsh** 初版 単式：1853, 複式：1830

【『馬耳蘇氏記簿法』原著 1871,

『馬耳蘇氏複式記簿法』原著 1871】

**Marsh 銀行書** 1856

**Bryant et al.** 初版 1861

【『帳合之法』原著 1871】

**Folsom** 初版 1873 (改訂版 1881)

【『簿記学例題』他原著 1873】

②

①

福澤『帳合之法』 1873/74

加藤『商家必用』 1873/77

Shand『銀行簿記精法』 1873

小林『馬耳蘇氏記簿法』他 1875/76

宇佐川『日用簿記法』 1875

森島『簿記学例題』 1878

函師『簿記法原理』 1881

①

②

③

# 5. 3組の簿記書から読み解く, 西洋簿記の導入史



- 邦訳における類似点
  - 『銀行簿記精法』と『帳合之法』
    - 『銀行簿記精法』

「凡例」における貸借分類の説明に対して、『帳合之法』（巻之一）にある福澤の解説を引用
    - 『帳合之法』

巻之三における邦訳語の説明において、『銀行簿記精法』の訳語を紹介
  - 『帳合之法』と『馬耳蘇氏記簿法』『馬耳蘇氏複式記簿法』
    - 『馬耳蘇氏記簿法』および『馬耳蘇氏複式記簿法』

『帳合之法』による縦書きの帳簿形式を模倣, 改善

# 『帳合之法』の日記帳

二一  
丁丁

✓		✓		✓		✓		✓		✓		式一第
伊勢屋ヨリ買代現金 麦粉 三百俵	帳面筆紙代現金拂	伊勢屋へ賣代現金 小麦 百俵	大阪屋ヨリ買代六十日限此方手形渡ス 小麦 五百俵	和泉屋へ賣代三十日限同人手形請取 麦粉 百五十俵	河内屋へ賣代掛 麦粉 二百五十俵	大和屋へ賣代現金 麦粉 三百俵	山城屋ヨリ買代掛 麦粉 千俵	明治六年	一月一日	日記帳	東京三田	
十五日	十四日	十二日	十日	七日	五日	二日	二日	福澤諭吉				
円五可へ		円一、二五セ可へ	円一可へ	円七可へ	円七、〇セ可へ	円六、五〇セ可へ	円六、〇〇セ可へ					
		六、七五										
一、五〇〇	五〇	八〇〇	五〇〇	一、〇五〇	一、七五〇	一、九五〇	六、〇〇〇					

(出所:福澤[1874]卷之三, 25-26丁)

# 『馬耳蘇氏複式記簿法』の日記日用帳

二					一		
七 栗 本 商 社	九 盛 岡	七 栗 本 商 社	五 島 村 商 社	三 大 村 商 社	一 岡 田	二 藤 村	明治七年五月四日
今月八日ノ勘定同社へ六ヶ月限ノ手形ニテ	同人へ貸金ニテ	同商社ヨリ六ヶ月ノ貸ニテ買入タル品物但シ送状控帳第三丁ノ通り	同社ヨリ差引勘定ニテ買入タル品物但シ送状控帳第三丁ノ通り	同商社ヨリ差引勘定ニテ品物ヲ買但シ送状控帳第二丁ノ通り	同人ヨリ元金請取高ニテ	同人ヨリ元金請取高ニテ	
十四日	十一日	八日	七日	五日		貸	
三四五	二九五	五〇					円
四七二	四七〇						銭
一五、六二〇	二九五	五九		二六五	五、〇〇〇	一、〇〇〇	円
四九二	四七二	四二〇		六〇〇	〇〇〇	〇〇〇	銭
	二	〇		〇	〇	〇	厘

(出所:小林[1876]卷之三, 25丁)

# 『帳合之法』の売上帳(売帳)

四三  
丁丁

二一  
丁丁

六博 多屋	帳金	丁四	帳金	帳手
	三島屋 鏡台 針箱	小幡屋 ふとん 桐箆 勝手 桐箆 椅子	伏見屋 槻塗り 寝台	京屋 小形 腰掛 長椅子 手洗台
	六日	五日	同日	四日
	一一	一二 六一	一	一一 一一 二
代現金	代金差引	代現金	三十日限手形	代金差引
京都	東京 四八	横浜 三〇 一五	大坂	大坂 八九 七五
一	五	一	二	六
二	五	五	九	一
			五〇	

同小形	帳金	丁五	帳金	帳手
	黒塗 藤坐 田屋 秋屋	奥州屋 桐重 同重 同重 同重	熊本屋 楠大 槻寝 槻寝 マア ブル	同小形 黒塗 藤坐 田屋 秋屋
	三日	二日	同日	同日
	一一 一六	一一 一一	一	一一 一一 一
代現金	代金差引	代現金	代金差引	代現金
横浜 一一 七四	東京 二二 四五	東京 二二 四五	東京 二二 四五	東京 二二 四五
六	六	一	二	六
一	一	〇	〇	一

式四第  
明  
治  
帳  
二六  
日 年

(出所: 福澤[1874]卷之三, 25丁)



# 『馬耳蘇氏複式記簿法』の送状控帳

二一

				記													明					
鐵大熊手	鐵熊手	上櫛	並櫛	紙	斧	錐	茶磨	餅型	剃刀	大鋸	六尺鋸	茶七	銀食	櫛	天秤	苗刈	草刈	鎌砥石	鍬	鍬	岡田ヨリ元金トシテ差出シタル品物左ノ通	明
十本	二十本	百枚	百枚	一束	二十本	二千本	五十個	百本	三十本	二十本	二十本	十個	二十五個	二百個	六十座	二十挺	四十挺	五十箱	二十挺	二十挺		七
同	一本	同	一枚	同	一本	一個	同	同	一本		同	同	一本	一枚	一座	同	一挺	一箱	同	一挺		七
九・五〇〇	五・五〇〇	・八七五	・六二五	二・〇〇〇	・〇〇〇	・五〇〇	・六二五	・〇〇〇	・二〇〇	・三〇〇	四・七五〇	二・〇〇〇	五・〇〇〇	・六二五	一・〇〇〇	・〇〇〇	・〇〇〇	・二五〇	・七五〇	・七五〇	円	五
九・五〇〇	一・〇〇〇	・八七五	・六二五	五・〇〇〇	・〇〇〇	・二五〇	・六二五	・六〇〇	・六〇〇	・六〇〇	九・五〇〇	二・〇〇〇	一・二五〇	・〇〇〇	一・二五〇	・〇〇〇	・二六〇	・四八〇	・一六二	・一五〇	厘	日
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	東京
				三、一二五													東京					
				〇													錢					
				〇													厘					

(出所:小林[1876]中巻, 86丁)

# 5. 3組の簿記書から読み解く、 西洋簿記の導入史

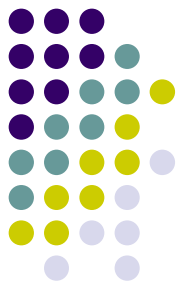


- 明治最初期の簿記書間の関係
  - ほぼ同時期に出版された『帳合之法』と『銀行簿記精法』においても互いに参照している
    - 西洋簿記の知識の導入過程として、簿記書間の相互作用を捉えることができる
  - 『馬耳蘇氏記簿法』および『馬耳蘇氏複式記簿法』は単に『帳合之法』の帳簿形式を模倣しただけではなく、これの改善を試みている
    - 西洋簿記の知識の導入過程において、知識の改善過程を見出すことができる



## 6. 研究結果と課題

- 先行研究の見解
  - 明治初期の簿記書史は，単なる邦訳簿記書の時代
  - 明治初期の簿記書の系統分け
    - 『帳合之法』と『銀行簿記精法』，『馬耳蘇氏記簿法』および『馬耳蘇氏複式記簿法』という3つの潮流から捉える
    - 慶應義塾，商法講習所，文部省という簿記の教育機関や工部省，紙幣寮，造幣寮という西洋簿記の実施機関など6つの西洋簿記導入の源泉から，明治初期の簿記書の執筆者を捉える



## 6. 研究結果と課題

- 西洋簿記導入過程に対する研究結果
  - 西洋簿記の知識の導入は、先に出版された簿記書の内容を紹介、模倣するといった簿記書間の相互作用によってなされた
  - また、単に先に出版された簿記書の内容の紹介や模倣を行うのではなく、より日本の慣習やその利用に合わせて工夫・改善がなされた
  - 明治初期の簿記・会計史を3つの潮流、あるいは6つの系統に分けて捉えるのではなく、これらの相互作用としてその知識の導入過程を捉えられる



## 6. 研究結果と課題

### ● 今後の課題

- 本研究の結果として導き出した結論を補足すべく、明治初期の簿記書考察を継続して続けるなかで再考、検証を加える必要がある。
- 明治時代の簿記書は「邦訳簿記書の時代」から、日本人自らが簿記理論を展開した簿記書が出版される時代へと移る。この簿記理論が展開されている簿記書に関しても、連続した西洋簿記の導入史としての視点から分析を行っていきたい。

# 引用文献

- Bryant, H. B., Stratton, H. D. and Packard, S. S. [1871] *Bryant and Stratton's Common School Book-keeping; Embracing Single and Double Entry, Containing Sixteen Complete Sets of Books, with Ample Exercises and Illustrations, for Primary Schools and Academies*, New York (reprinted ed., Saga, 1994).
- Folsom, E. G. [1873] *Folsom's Logical Bookkeeping. The Logic of Accounts; A New Exposition of the Theory and Practice of Double-entry Bookkeeping, Based in Value, as Being of Two Primary Classes, Commercial and Ideal; and Reducing All Their Exchanges to Nine Equations and Thirteen Results*, New York and Chicago (reprinted ed., New York, 1976).
- Gilbart, J. W. [1856] *A practical treatise on banking*, Vols. I , 6th ed., London.
- Hutton, C. [1858] *A complete treatise on practical arithmetic & book-keeping*, edited by Alexander Ingram. a new edition, with many important improvements and additions including new set of books both by James Trotter, Edinburgh.
- Inglis, W. [1881] *Book-keeping By Single and Double Entry : with an Appendix Containing Explanations of Mercantile Terms and Transactions, Questions in Book-keeping*, London.
- Marsh, C. C. [1871] *A Course of Practice in Single-Entry Book-keeping, Improved by a Proof or Balance, and Applied to Partnership Business: Designed for the Use of Merchants, and Schools; Comprising a Series of Mercantile Transactions, Arranged to Form a Complete Course of Practice; Adapted to the Wholesale and Retail Business in the United States*, New York.
- [1866] *The Science of Double-Entry Book-keeping, Simplified by the Application of an Infallible Rule for Journalizing; Calculated to Insure a Complete Knowledge of the Theory and Practice of Accounts: Being a Series of Well-Selected Mercantile transactions, So Arranged as to Form a Complete Course of Practice and Instruction; Designed for the Use or Schools and Counting-House in the United States; Including Numerous Examples of Mercantile Calculations; and an Original Diagram Showing the Relation Between the Account Books*, New York.
- [1978] *The Theory and Practice of Bank-bookkeeping and Joint Stock Accounts; exemplified and elucidated in a complete set of bank account books; arranged in accordance with the principles of double entry; embracing the routine of business from the organization of a company to the declaration of a dividend; with all the forms and details and an original diagram*, New York.

# 引用文献

- Previts, G. J. and Merino, B. D. [1979] *A History of Accounting in America; An Historical Interpretation of the Cultural Significance of Accounting*, New York (大野功一・岡村勝義・新谷典彦・中瀬忠和・中島朝彦訳[1983]『プレヴィッツ＝メリノ アメリカ会計史』同文館出版).
- and Merino, B. D. [1998] *A History of Accountancy in the United State; The Cultural Significance of Accounting*, Columbus, Ohio.
- Shand. A. A. 著・大蔵省訳[1873]『銀行簿記精法』巻之一～五, 大蔵省。  
宇佐川秀次郎訳[1878]『日用簿記法』(ただし, 雄松堂復刻版(1981)を使用)。  
片岡泰彦[2007]『複式簿記発達史論』大東文化大学経営研究所。  
————— [2008]「アラン・シャンド『銀行簿記精法』に関する一考察」『経営論集』(大東文化大学), 第15号, 43-62頁。
- 加藤 斌[1873/1877]『商家必用』(ただし, 雄松堂復刻版(1979)を使用)。  
黒澤 清[1976]「近代簿記会計の誕生」青木茂男編『日本会計発達史—わが国会計学の生成と展望—』第1章, 3-29頁。  
————— [1990]『日本会計制度発展史』財経詳報社。
- 小林健吾[1994]『日本会計制度成立史』情報出版。  
小林儀秀訳[1875]『馬耳蘇氏記簿法』第一・二巻, 文部省。  
————— 訳[1876]『馬耳蘇氏複式記簿法』上・中・下巻, 文部省。  
関師民嘉[1881]『簿記法原理』(ただし, 雄松堂復刻版(1981)を使用)。  
千葉準一[2008]「日本会計制度史研究の方法」『経済志林』(法政大学), 第76巻第2号, 189-205頁。  
中野常男[1992]『会計理論生成史』中央経済社。  
西川孝治郎[1971]『日本簿記史談』同文館出版。  
————— [1982]『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂書店。  
三代川正秀[1997]『日本家計簿記史 アナール学派を踏まえた会計史論考』税務経理学会。  
森島修太郎[1878]『簿記学例題』(ただし, 雄松堂復刻版(1981)を使用)。  
福澤諭吉訳[1873/1874]『帳合之法』巻之一～四, 慶應義塾出版局。